

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話：070-1503-6401/044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第166号

かわさきの
郷土史を読む 6

伊藤葦天著『川崎新風物詩』・『川崎風土記』(その2)

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 新井 悟

伊藤葦天著『川崎風土記』の中から、今回は多摩川の話を紹介したいと思います。とりあげるのは、「多摩川北へ遷る」(同書20頁)と「穴沢天神縁起」(同書22頁)です。

「多摩川北へ遷る」

私たちは、現在の多摩川に慣れ親しんでいるので、はるか昔から同じところを流れているように思ってしまう。そうでない場合でも、川の流れが変わることがあったにせよそれは相当古く起こったことか、小規模な流路変更であったらうと想像しがちです。しかし、伊藤氏の記事「多摩川北へ遷る」を読むと、それが比較的新しい時代におこったことで相当大きな変化であったことがわかります。天正18(1590)年ごろ、多摩川が大洪水に見舞われます。この洪水で、登戸あたりでは、今の多摩警察署や消防署あたりを流れていた多摩川の本流が、現在の流れのあたりに移動したというのです。その傍証は、「小田原北条分限帳」記載の永禄2(1559)年の記事として「多波川(多摩川:筆者注)北駒井本郷二貫七百文、同所登戸十二貫五百文(後略)」とあって、登戸が多摩川の北にあると記載があることです。またそのより直接的な証拠として、現在の稲城市に立地する穴沢天神社の縁起にあるというのです。では、「穴沢天神縁起」をみてみましょう。

「穴沢天神縁起」

穴沢天神社は、多摩丘陵の一角、現在はよみうりランドがある山の中腹にあります。この山には小沢城があり、穴沢天神社はその郭(くるわ)の上に立地しているとの指摘もあります。その縁起というものは、伊藤氏の要約によるとつぎのとおりです。「頼朝の時代稲毛三郎重成が小沢郷を領していた頃は玉川がその山裾を流れていて耕作地が少かったが、偶々正治元年の洪水に一人の童が神懸りになり天満宮を山の上に祀れば百日の間に靈験が有って百姓が楽になるといった。そこでその年の7月25日に山上に一社を建て、祀った処が果たして玉川が五丁ばかり北の方に移って広い耕地が出来た、というのである。」と。

正治元年となると中世の話ですが、伊藤氏はこれが天正18年のことであるといっています。その根拠は、穴沢天神社の棟札に「天正十八年庚寅口小春二十五日」とあるからです。童子の予言により社殿を移したというのは物語上のレトリックで、実際には洪水があったので、社殿を改築して山の上に移したということです。そうすると多摩川は、今の稲城市大丸あたりから多摩丘陵の山裾を流れていて、稲城市の現穴沢天神社の山裾をとおり、菅城下、土淵、登戸の多摩警察署あたりへとつながり、さらに下流へも長尾を通過し、津田山の北をとおり、溝口に達していたことでしょう。

この自然史の大事件は、2022年の現在に生きる私たちからすれば、およそ430年前のことになります。これを大昔と考えるか、それほど遠くない過去と感じるかは人によると思いますが、この時に多摩川が流路を大きく変えるほど大暴れしたことが、伊藤氏の記事を読むとよくわかります。現在の防災にも有用な情報で、こんなところにも郷土史を読む大事さがあると思います。ちなみに江戸時代の農業用水として国の登録記念物に登録された二ヶ領用水は、中野島から津田山までは、流路変更する前の多摩川の本流を利用したものであると考えられます。

今回は、山裾を多摩川が流れる地に築城された小沢城について、『川崎風土記』を読んでみたいと思います。

ご興味がある方のために、川崎市立図書館の蔵書をご紹介します。『川崎新風物詩』は、川崎、中原、高津、多摩、柿生の各図書館に所蔵されています。柿生には貸出用がありますが、ほかは貸出禁止となっています。『川崎風土記』は、川崎、幸、中原、高津、多摩、麻生の各図書館に所蔵されています。高津・多摩には貸出用がありますが、ほかは貸出禁止となっています。(2022(令和4)年1月4日時点)。なお伊藤氏には多くの著作があります。このうち、川崎市立図書館に所蔵されているものをご紹介します。郷土史関係の著書には、『稲毛三郎重成と梶形城址』(1955)、『掘出した伝永徳の屏風』(1956)、『中野島開発記』(1957)、『稲毛郷土史』(1970)があります。さらに文学関係の著作として、『六月之旅』(1965)、『葦天随筆集』(1969)、『穂 - 伊藤葦天句集 - 』、『多麻澁 - 伊藤葦天第二句集 - 』(1971)、『多麻澁以後 - 伊藤葦天遺句集 - 』(1975)ほかが所蔵されています。

参考文献:伊藤葦天 1958『川崎新風物詩』かわさき新報社 / 1963『川崎風土記』川崎新聞社

大地に刻まれた
歴史探勝 3

縄文土器に装飾された人・動物等の意匠を知る

村田 文夫(日本考古学協会会員)

縄文土器に付けられた各種の装飾文様は、見る人を楽しませ、豊かな縄文世界に誘ってくれます。今回は、人・動物などの装飾意匠に関心をむけてみましょう。

わたくし達は、イノシシやシカには縄文時代から縁が深いですね

ここ数年、イノシシやシカが人間のテリトリー(領域)に進出し、トラブルを起こして困りますね。縄文具塚から発掘される獣骨類は、両種を合わせると約 60%前後になり、圧倒的な多数派。川崎市域の貝塚からも必ず発掘される獣骨類で、縄文人のお腹を十分に満たしました。

■土器の把手部分に造作されたイノシシの表情など

縄文土器の把手部分には各種の装飾がつけられています。人物画のほか、動物類ではイノシシが圧倒的に多いのは真実です。何故か縄文前期の諸磯期(今から 5800 年前頃)に好かれていました。口元は太い横位の一本線で特徴を表現しています。縄文イノシシは、現在種より大形で 150 kg 前後もあるといわれています。シカは1回のお産で1頭、イノシシは多産(冗談でシメシメ 16 匹。真相は 10 匹以下)でした。

多産性に関連づけると、千葉県市原市能満上小貝塚から発掘されたイノシシ形土製品は優品です。発見時は前後 4 本の足と、尾・耳を欠き、胴体部分だけでした。その後、10~20m 離れた場所から、右・左の後足が発見され、欠損部分と接合しました。これは偶然ではなく、イノシシのもつ多産性から、縄文人は脚部などを意識的に欠損して、それをムラ内の要所にばら撒いて、地力を回復し、おそらく食糧の豊穰などを祈願したのでしょう。

ちなみに、妊娠した女性を表現した縄文時代の土偶像も、わざわざ壊してムラ内にバラ撒いて豊穰を祈願したという説もあります(土偶は始めから、壊されるのが目的の造形物)。

■どうして大嫌いなマムシばかりを描くのだ!!

多く人は蛇嫌いであろう。わたしはそれが人一倍。しかし縄文人は、土器の把手部分に飛び掛からんばかりに蛇を造形する素晴らしい?芸術家揃い。それも三角形に造形した頭部から、毒蛇のマムシであることは間違いない(マムシこそが真虫でした)。川崎市内からは、宮前区野川、麻生区黒川、麻生区細山、宮前区土橋から合計 5 点の資料が報告されています。

5 点のなかでは、第 1 図の野川西耕地遺跡から発見された蛇身装飾把手が最も秀逸。横から見ると、鎌首をもちあげ、まさに飛び掛からんとするポーズ。迫力満点ですね。

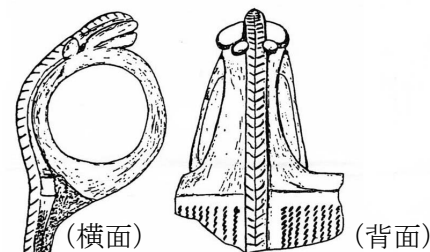
台湾の高砂族は、身の回りの道具類に、百歩蛇という蛇をモチーフ(意匠)にした装飾をしました。百歩蛇に噛まれたら、百歩も歩かないうちに死んでしまうとされました。再生不死のスネークパワーを人間が生きる力として利用しているわけで、マムシの造形も同じ心理からでしょう。

蛇こそ家の守護神。昭和 40 年代のわたしの体験談。実家の古い茅葺き家を壊して建て替えた時、屋根裏から大きな青大将が。すると古老が大声で「蛇は逃がせ!!」。理由は家をずうっと護っていた神様だから。蛇が家の守護神であることは本で読んだような気がしました。

■顔面付の把手を、神格化し飾り物にしていた?

縄文中期の遺跡からは、土器の把手部に人の顔を造形した「顔面(人面)把手」と呼ばれる土器が発見されていますが、以下にその変形バージョンを紹介します。

発見は昭和 2 年 8 月。高津区長尾下原遺跡から偶然掘り出されました。第 2 図のように、三日月形に吊り上がる両目、円形に開き、叫んでいるような口元、口の両脇に垂れ下がる両耳(耳飾りを装着している)。すこぶる特異な風貌である。5000 年前の製作された時には、人面は土器の最上部につけられていたが、その後、顔面部が本体から離れたのでしょう。顔面部の底部は、擦り減って平坦です。おそらく土偶のように神格化し、家奥の台石上に置くとか、頭部にある穴に紐を通して吊り下げるなどして、真摯に祭祀をしたのでしょう。欠損品にして、最上の逸品ですね。



第1図 野川出土の蛇身把手



第2図 長尾出土の人面把手

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育(22)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

学校行事の役割

村落共同体の伝統から見ると、学校は異質の存在でした。そんな学校や「学級」を、どうやって子どもたちの世界や地域社会に定着させるか。これが学校に科せられた大きな課題でした。立身出世主義はその一つの回答だったのですが、しばらく学校に通えば、村の期待を担えるような神童であるかどうかの見当はつきません。神童とは距離のある普通の子どもたちを学校に繋ぎ留めておくためには、何らかの別の工夫が必要でした。

この点で大きな力を発揮したのが、運動会や遠足、そしてさらに遅れて導入された修学旅行など、いくつもの学校行事でした。家族旅行は勿論、新婚旅行の習慣すらなかった時代です。

一生を狭い地域社会の中で過ごす貧しい農民たちにとって、乗り物に乗らず、徒歩で出かける遠足でさえ、日常生活の場と異なる世界を垣間見る晴れがましい経験だったのです。まして乗り物に乗って泊りがけで出かける修学旅行は、まさに一生に一度だけ外の世界と景色に接する心躍る機会となったのです。貧しさゆえに参加出来ない子もありましたが、多くの親が相当な無理をして参加させていたことも事実です。

こうした中で、村落共同体の違いを超えて、子どもたちに学級の絆を強く印象付けることに成功した行事が運動会でした。運動会には個人競技もありましたが、綱引きや棒倒し、騎馬戦に玉入れ、そしてリレーなど学級対抗競技が数多く用意され、まさに学級間の勝敗が競われたのです。西欧列強に追いつけ追い越せが国是とされ、何事においても競争の勝者となることが推奨されていた時代です。当然運動会における学級対抗の位置づけは、親兄弟をも巻き込んで、大きな盛り上がりを見せたのです。教師もまた当然のように、何事につけ同じ学年の他学級に対する対抗心を煽りました。それは運動会に限らず学習の進度や到達度などでも同じだったのですが、競技の成績というのは、すぐに眼に見える形で現れますから、子どもたちに対する影響力は絶大だったのです。

明治期の運動会は、入学後間もない5月頃に行われる(それは田植でネコの手も借りたくなるほど忙しくなる直前の時期でした)ことが多かったのですが、運動会を契機として、学級間の競争意識が植え付けられ、村落共同体の仲間意識はそのままに、学級共同体という意識も次第に醸成されていったのです。

運動会の歩みをひも解くと、当初は海軍兵学寮とか、札幌農学校、東京大学予備門などの高等教育機関に連なるエリート校で、イギリス人教師の指導の下で、パブリックスクールなどで広まっていた徒競走、ハードル、跳躍、投擲など個人の身体能力を競う競技会として始まったとされています。しかし、こうした初期の「運動会」は、日本で独自に発達した団体競技を中心とした運動会とは違った性質のものでした。数々の団体対抗競技を中心に、いくつかの個人競技やダンスなどをアレンジした、我々に馴染みのある運動会は、まさに日本で生まれ、日本独自の行事として成長し、日本とごく一部の国々でのみ、今も行われている行事なのです。日本における運動会は学級間の競争意識を煽り、そうした競争意識を梃子として、学級集団の結束を生み出す役割を担い、見事にその期待に応えたのです。

学校行事としての運動会は、やがて地域にも移植され、村内であれば字の対抗として、より広範な範囲を包括する場合は村対抗の運動会として行われました。私の住む王禅寺では、1989(平成元年)年まで、町内の字対抗の運動会が行われましたし、旧柿生村を範囲とする町会对抗運動会は、参加町会は少なくなりましたが、現在でも麻生環境センターふれあいの丘を会場として行われています。学校においても、学内の運動会とは別に、学校対抗の運動会が行われています。

運動会に代表される学級間の対抗意識は、異なる地域共同体に属する子どもたちの間に一体感を産むと同時に、学級を代表する存在となった担任教師と子どもたちの間にも、一体感を産むことに成功してゆきます。このようにして、よそ者である教師と地域に根差した子どもたちの遠かった距離は、少しずつ埋められていったのです。

(続く)



1942(昭和17)年の寺地国民学校(足立区西新井)の運動会風景



1985(昭和60)年の王禅寺町内会運動会の開会式 入口、谷戸の字名が見える

柿生・岡上の
地域文化財

岡上(2) 岡上のどんど焼きー上・下地区、谷戸地区、川井田地区

岡上に親しむ会(郷土誌会)

岡上では古くから上・下、谷戸、川井田の3地区でどんど焼きが行われ、現在に続いています。この3地区の「どんど焼き」が令和3年度に「川崎市地域文化財」の指定を受けました。

現在では上・下地区は岡上神社の西側隣接地で、谷戸地区は谷戸の田んぼで、川井田地区は和光大学の坂下の田んぼで行われています。点火は川井田地区午後3時、谷戸地区午後4時、上・下地区午後5時と時間差で行われます。※

岡上では「どんど焼き」は「せいのかみ」とも呼ばれています。せいのかみ(賽の神)は、ムラの境で邪悪な物の侵入を防いでくれる「道祖神」の呼び名でもあり、道祖神の近くで行われるのが本来的なものといえます。古くからの人によると、上・下地区は神社の社務所の建っている所、谷戸地区では辻の地蔵様の前の道辺り、川井田地区では川井田谷戸の入口辺りで行ってたこともあったそうです。また御神体とみられる石があって、火祭りに重要な役割を果たしたといえます。谷戸地区の石は扁平な自然石であり、川井田地区の石は「セエノカミ」と呼ばれ、川井田の辻に小屋掛けして祀られています。

小正月の1月14日に、竹、茅、笹、木の枝、藤つるなどで作られたやぐらを、門松や注連縄などの正月飾り、達磨と一緒に燃やし、一年間の災いを払い、五穀豊穡や家内安全、無病息災を願います。燠になった火で、米粉で作った団子を檜の木の三叉の枝に刺して焼いて食べると風邪をひかないといわれています。

岡上では、江戸時代からの地区の講中のなごりが残っており、どんど焼きや辻のお地蔵様の維持管理は、講中が中心になって行っています。せいのかみのやぐらは3地区それぞれの方法で組み立てられています。また昔は子供たちが主役の行事でした。リヤカーをひいて各家を廻り、正月の飾りを集めて、ご祝儀をもらってお菓子を買うのも楽しみだったそうです。山に入って竹や笹を切り出し、やぐらを組み立てるのも子供たちでした。そんな光景が残る昭和51年頃の様子はテレビ神奈川『神奈川再発見 岡上風土記 川崎 飛地』に残されています。

(※ 川井田地区は昭和40年頃で一時中断しましたが、和光大学、西町会、川井田地区有志の協力で復活し、現在は14日の近くの土日に合わせて行われています。)

参考資料「郷土岡上の歴史・文化継承事業報告書」、「岡上の魅力再発見 調査報告書」など

今年のどんど焼きの様子



川井田のどんど焼き:小田急線の電車からもよく見える。



谷戸のどんど焼き:上が閉じない作りになっている。焼け残った地中に打ち込まれた杭は家の守り神となる。



上・下のどんど焼き:小学生が多く参加し楽しんでいた。

柿生郷土史料館催物案内【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日(原則として月4回)

3月 13・20・27日(毎日曜日) **4月** 2・16・23日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時~午後3時(緊急事態宣言、蔓延防止等重点措置宣言下では休館です)

第19回 特別企画展

写真で見るふるさとの原風景

戦後における村々の変貌の過程や、各地の開発の様子など、柿生地区村々の変遷の様子をお楽しみください。なお緊急事態宣言等が発令されている期間中は、解除まで再々休館・再日程となります。

期間 10月2日(土)~3月27日(日) 会場 柿生郷土史料館特別展示室